

本科 1 期 7 月度

解答

Z会東大進学教室

## 早慶大日本史



# 11章 江戸時代の経済の発展

## 問題

### ■確認問題

- 1 紫雲寺渴新田 2 鯪（鰯） 3 備中鉄 4 千歯扱 5 阿波  
6 『農業全書』 7 いりこ・ふかのひれ・ほしあわび 8 碓氷・福島  
9 助郷役（伝馬役） 10 菱垣 11 河村瑞賢 12 蔵元 13 日本橋  
14 運上 15 秤量 16 銀

### 【1】

#### 解答

- 設問A ① 出女 ② 菱垣廻船 ③ 河村瑞賢 ④ 角倉了以  
設問B (a) 和宮 (b) 助郷役（伝馬役） (c) 問屋場 (d) 南海路 (e) 北前船  
設問C ア-5 イ-7 ウ-9 エ-4

#### 解説

##### 設問A

- ① 徳川幕府は治安維持を目的として五街道を中心に関所を50数カ所設置し、関所手形（通行手形）の確認を行った。とくに、東海道の箱根関では、江戸への武器の持ち込みを防ぐため「入鉄砲」と、江戸に居住する大名家族（参勤交代で「人質」となっていた）の脱出を警戒して「出女」を厳しく取り締まった。なお、中世の関所は幕府や大名・本所などが通行税として関錢を徴収するために置いたものである。近世の関所との目的の違いを押さえておこう。戦国大名は、円滑な流通を阻害すると考えて関所を撤廃した。
- ② 近世には、全国から物資が「天下の台所」である大坂に集まり、「將軍のお膝元」として人口100万人を有する江戸に送られて消費されるという流通ルートが形成された。物流には、陸路より大量の物資を安価に輸送できる水上交通の方が適している。大坂～江戸間は南海路で結ばれ、菱垣廻船が就航した。荷積の落下を防ぐために菱形に組んだ垣を船の両舷についていたのでこう呼ばれる。近世前期にはほぼ独占状態であったが、18世紀になると樽廻船が出現した。樽廻船はもともと酒荷を中心に扱っていたが、十組問屋の酒店組から独立して営業を開始すると、小回りが利いて迅速であるという200～400石船の特性（樽廻船は「小早」と呼ばれた。菱垣廻船は1000石だった）を活かして優勢になり、菱垣廻船は衰退していった。
- ③ 河村瑞賢は、伊勢の貧しい家に生まれ、一代にして名を成した商人である。江戸に出て日傭人夫から小さな店を持つまでに至った瑞賢は、江戸市中の半分近くが焼失した明暦の大火（1657）において、復興に必要な材木を買い占め、土木建築を引き受け一躍巨利を得た。治水技術にも長けていた瑞賢に、幕府は東北地方の産米を輸送する海上交通網の整備を命じた。これまで、陸路で江戸まで1ヶ月ほど要していたからである。瑞賢は、1671（寛文11）年に日本海沿岸から房総半島を回って江戸湾に入るルートを、翌1672（寛文12）年には下関を回つて瀬戸内海を通り大坂に至るルートを完成させた。これが東廻り航路・西廻り航路である。

④ 江戸時代には、海上交通に加えて河川交通も内陸部の物資輸送のために整備された。とくに、京都～伏見間を結んだ高瀬川は、「高瀬船」と呼ばれる小型船が行き交って都市輸送を支えた。この高瀬川の他、富士川・保津川などの開発に当たったのが、京都商人の角倉了以である。了以は朱印船貿易で財をなす一方、国内の水路開発にも尽力した。また、河村瑞賢も大坂を流れる安治川の開削に当たっている。

#### 設問B

(a) この問題は幕末の「公武合体運動」で扱う内容であるから、その時にまた確認してほしい。1860（万延元）年の桜田門外の変で大老井伊直弼が暗殺された後、老中首座として幕政を任せられた安藤信正は、朝廷（公）と幕府（武）の融和をはかることで政局を安定させようと考えた。これを「公武合体」策という。信正は、14代將軍徳川家茂の正室に時の孝明天皇の妹に当たる和宮を迎えると画策した。問題の「皇族の女性」はこの和宮のこと。なお、列強からの砲撃を避けるため、太平洋に面した東海道ではなく内陸の中山道を選んだとされる。

(b) 街道沿いの村々では、公用の人馬を差し出す夫役が課せられていた。人馬の徵發の対象として指定された村を助郷といい、この夫役を助郷役（伝馬役）といった。

(c) 宿駅には、公営の人馬や荷物を継ぎ替える施設が置かれた。これを問屋場といいう。問屋の管理の下で年寄・馬指などの役人が実務を行った。幕府公用の飛脚は、この問屋場で人馬を交替して継ぎ送った。これが「継飛脚」である。

(d) 大坂から江戸に向かう船は、まず紀伊国へのりを進むように南下する。紀伊国は、古代の七道制では四国の諸国とともに南海道に属し「南紀」と表記することもあった。そこで、大坂～江戸間を結ぶ航路を南海路という。ここに菱垣廻船や樽廻船が就航したのである。

ところで、設問Aの②でも見たように、「天下の台所」大坂から「將軍のお膝元」江戸へというのが物資の基本的な流れであった。大坂の二十四組問屋が荷を積み、江戸の十組問屋がその荷を受ける。では、江戸から大坂への帰りに、船は何を運んだのだろうか？ 正解は干鰯である。九十九里浜の鰯は金肥として干鰯に加工され、主に畿内の綿作・菜種作で利用された。菱垣廻船・樽廻船は干鰯を積んで大坂に帰っていたのである。

(e) 江戸時代中期頃になると、材木・食品・米粕などが生産される蝦夷地（松前地）は、三都の消費や長崎貿易（俵物を中国に輸出）を支える重要な拠点となつた。松前から日本海の各港を通り、下関を回って大坂まで運航した船を北前船という。明治中期まで見られたが、近代化の波の中で汽船にとって代わられた。

#### 設問C

ア・イ 各街道の宿駅の数は、東海道が品川～大津間に53宿（歌川広重の『東海道五十三次』はその全ての宿駅を描いた浮世絵である）、大津～大坂間に4宿、中山道が板橋～守山間に67宿（草津で東海道に合流）、甲州道中が内藤新宿（現在の新宿）～上諏訪間に44宿、日光道中が千住～鉢石間の21宿、奥州道中が宇都宮で日光道中と分離して白沢～白河間の10宿である。宿駅は城下町など各地の流通の中心に置かれ、大名の参勤交代の他、寺社参詣・行商人・出稼ぎ労働者の往来で賑わつた。

ウ・エ 五街道は江戸と各地の主要都市を結ぶために整備されたものであるから（大名を幕府の監視下に置くことが目的）、公用による通行が優先された。各宿駅には人馬が常備され、幕府の役人らは利用することができた。その数は、東海道では100人・100疋、中山道では

50人・50疋、その他は25人・25疋。これを周辺の村々で負担するのが、設問Bの(b)で見た助郷役（伝馬役）である。

## 【2】

### 解答

- 問1 d 問2 e 問3 b 問4 e 問5 a 問6 a 問7 e  
問8 c 問9 a 問10 d  
問11 ア - i イ - f ウ - a エ - e オ - c  
問12 ア - h イ - n ウ・エ - d・f オ - c カ - e キ - g  
ク・ケ - k・m コ・サ - j・l シ - a (ウ・エ、ク・ケ、コ・サは順不同)

### 解説

問1 代官見立新田は代官が開発可能な土地を見出し、代官主導で開発させた新田をいう。積極的に奨励されたのは享保期であり、代官は新田年貢の10分の1を受け取ることが認められた。一般に入試問題では、徳川吉宗が日本橋に高札を掲げて町人請負新田を奨励した点が問われることが多く、今回のように代官見立新田の時期について問うものは珍しい。江戸時代の農業史は早稲田大学でも頻出であり、ものによっては代官見立新田の説明に「享保期に積極的に奨励された」と記されていることもあるので注意してほしい。

問2 18世紀初頭、新田開発を行った商人としてよく知られているのは鴻池善右衛門である。善右衛門は河内に鴻池新田を開発した。

問3 玉川庄右衛門と清右衛門（兄弟か？）の両氏が幕府に建議して多摩川から玉川上水を引いたのは1654（承応3）年である。ここまで細かい年代は不要であり難問といえる。

問4 田下駄は弥生時代、足が湿田にはまらないように使用された板状の特大な履物で、穴が4つあいており足に紐で括りつけて使用された。千歯扱は後家倒しと呼ばれた脱穀具で、こき箸に代わって使用された。千石籠と唐箕は選別具、備中鋤は深耕用に適した鋤で先端が3～4本に分かれていた。

問5 『農業全書』を著したのは宮崎安貞である。明の徐光啓が著した『農政全書』を参考にし、さらに安貞自らの体験・見聞をもとに作られた我が国最初の体系的農書である。1697（元禄10）年に出され、多くの農民に愛読され、農民の必読書とされた。田中丘隅は『民間省要』（享保期）、大蔵永常は『農具便利論』（1822）と『広益国産考』（1844）をそれぞれ著した。二宮尊徳と大原幽学は19世紀に活躍した農業指導家。

問6 三草とは藍（阿波）・紅花（出羽村山）・麻（近江など）である。カッコ内の代表的な産地とともに押さえておきたい。ちなみに四木は桑・漆・楮・茶である。

問7 やや難問。15世紀に朝鮮から伝わった木綿は、戦国時代に三河から生産が始まり、江戸時代になると西国一帯へ普及していった。よって三河より東にある遠江は木綿の産地としては当てはまらない。

問8 18世紀より江戸への下り酒で首位となったのは摂津の灘酒である。伏見は古代からの伝統を持つ酒の産地であり、摂津の酒と同様に最上級とされ、江戸への下り酒の代表である。しかし、設問には「首位にたった」とあるので灘が正答となる。銚子（下総）・野田（下総）・竜野（播磨）はいずれも醤油の産地である。これらも国名とともに覚えておきたい。

問9 角倉了以は糸割符商人の1人で朱印船貿易家。水路の開発にも功績を残し、<sup>おおい</sup>大堰川（保津川）・富士川・天竜川・高瀬川などを開いた。

問10 元禄期に呉服商と両替商で産をなした豪商は三井家である。初代の八郎兵衛高利は江戸に越後屋を開き、「現金掛け値なし」の商法で大成功した。越後屋は現在の三越百貨店につながる。

- a 初代の紀伊国屋文左衛門は紀伊熊野出身の豪商で、みかんの江戸廻送で成功し、江戸で材木商を営んだ豪商。
- b 初代の奈良屋茂左衛門は江戸深川の材木商で日光東照宮修理の材木を引き受けた。
- c 淀屋辰五郎は大坂の米問屋であったが贅沢を理由に全財産を没収された。
- e 鴻池善右衛門は摂津伊丹の酒造で財をなし、大名貸などで産をなした。その他前述通り新田開発を行った。

問11

ア・イ 大坂と江戸を結ぶ南海路を通る船には菱垣廻船と樽廻船があった。前者は堺の商人が創始したといわれ、十組問屋と提携しており、千石積で積荷の落下防止のため菱形に垣をめぐらしていたことから菱垣廻船と呼ばれた。菱垣廻船は到着が遅く、やがて到着の早い樽廻船に圧倒された。樽廻船は当初十組問屋の酒店組であったが、1730（享保15）年に独立して上方から江戸に酒荷を運搬した。200～400石積のため到着が早かった。

ウ・エ・オ 東廻り航路（海運）（1671）と西廻り航路（海運）（1672）を開いたのは河村瑞賢（瑞軒）である。河村瑞賢は明暦の大火に際して材木を買い占めて成功した人物。河川でも安治川を開いたことで知られる。西廻り航路に就航する船である北前船も重要事項。

問12 徳川家康は1600（慶長5）年に金座を江戸と京都に、銀座を伏見・駿府に置き慶長金銀を鋳造させた。金座では後藤庄三郎の下で小判・一分金などの計数貨幣を、銀座では湯浅（大黒）<sup>じょうぜ</sup>常是の下でなまこ形の丁銀とそれを補う貨幣として豆板銀の秤量貨幣を鋳造させた。計数貨幣とは種類ごとに素材の品位や重量・形状が一定であり、個数や額面によって流通する貨幣をいう。また、秤量貨幣とは重量を計ることによってその価値を決める貨幣である。銭座は1636（寛永13）年江戸と近江坂本に置かれ、寛永通宝を鋳造した。江戸では主に金貨が、大坂では主に銀貨が使用された。

## 12章 幕政の改革

### 問題

#### ■確認問題

- 1 田中丘隅 2 足高 3 小石川養生所 4 南鎌二朱銀 5 工藤平助  
6 50石 7 札差 8 海国兵談 9 上杉治憲  
10 A 万石 B 百 C 半年 11 足高 12 相対 13 七分  
14 D 旗本 E 棄捐 15 F 聖堂 G 異学 H 正学

#### 【1】

#### 解答

- 〔問1〕 あ 徳川家継 い 徳川家宣 う 徳川綱吉 え 徳川家治  
〔問2〕 イ 間部詮房 ロ 田沼意次 〔問3〕 1 新井白石 2 室鳩巣  
〔問4〕 木下順庵  
〔問5〕 A 足高制 B 質流（地）禁令 C 檢見法 D 手賀沼  
〔問6〕 上米 〔問7〕 半知

#### 解説

享保の改革に関する問題。商品経済の波に巻き込まれたことで、農村や武家社会は次第に動搖し始めた。このような状況の下で、將軍は自ら政治改革を推進する。この改革に見られる政治理念は、のちの田沼意次の政治、残りの2つの大きな幕政改革にも大きな影響を与えている。

#### 〔問1〕

あ・い 徳川家継は、6代將軍徳川家宣の子であり、5歳で將軍に即位、病弱のため8歳で死亡した。6代・7代の両將軍の政治では、新井白石が侍講として幕政に関わっている。

う 徳川吉宗は、新井白石の政策のうちとくに極端で行き過ぎたものを改め、もとに復した。

白石以前の將軍は、5代徳川綱吉である。

え 吉宗の子で9代將軍となった徳川家重は、紀州藩士から幕臣となった田沼意行の子である  
田沼意次を重用した。田沼意次は、小姓から加増を重ねて大名へと出世する。家重の子の徳川家治も、引き続き田沼意次を重用している。

#### 〔問2〕

イ もと甲府藩主である6代將軍家宣は、將軍となると、古くから信頼している甲府藩主時代の家臣約200人を幕臣とした。間部詮房は、その中から側用人に登用された。

ロ 田沼意次は、老中に就任する以前も、側用人という將軍側近役のうちの最上位にあり、幕政を主導する地位にあった。

#### 〔問3〕

1 新井白石は、木下順庵の弟子である。甲府藩主時代の6代將軍家宣の侍講に登用され、そのまま幕臣になり、6・7代將軍の治世を間部詮房とともに主導して「正徳の治」といわれる一時代を築いた。木下順庵の一門は、「木門」といわれる一派。

2 室鳩巣も新井白石と同様に木下順庵の弟子であった。新井白石が幕府の儒官に推挙し、吉宗の信任を得る。なお、室鳩巣は、赤穂浪士の事件に際し、義士の行動を絶賛している。著書『駿台雑話』、『六論衍義大意』。

〔問4〕 木下順庵は京都出身の朱子学者で、その系統は木門と呼ばれ、將軍の侍講となる者が多かった。木下順庵は5代將軍徳川綱吉に仕え、その弟子の新井白石は6代將軍家宣、7代將軍家継に、同じく弟子の室鳩巣は、8代將軍吉宗に仕えたのである。

〔問5〕

A 足高の制は、積極的に人材を登用しようとした制度であるが、幕府財政の膨張を防ごうとした制度としての一面もある。幕府の役職に就任する者の家禄がその役高に達しない時に、在職中に限ってその不足高を支給することにした制度である。

B 質流し（れ）禁令、あるいは流地制限令が入る。質流れの形で田畠が売買されるのを禁止した法令である。この法令は各地に質地騒動を引き起こすという混乱が生じたため、2年足らずで撤回された。

C 檢見法は、毛見法と書くこともある。米の収穫前に藩庁から役人を派遣し、毛（稲穂）の実り具合を検査してその年の年貢額を定めた。この方法は抜け道が多く、役人の不正が起りやすく、紛争が絶えなかった。

D 印旛沼・手賀沼の干拓事業は、単にその地域を干拓し、水田を増やすということに留まらず、沼の水を江戸湾に流すことによって新たな航路が開かれ、地回り経済圏の発展に繋がるというメリットもあった。結局、干拓事業そのものは失敗に終わった。

〔問6〕 上げ米は、幕府が財政窮乏を打開するために、大名に年貢を1万石につき100石上納させ、その代わりとして参勤交代を緩和した制度で、1722（享保7）年に制定された。単に「上げ米」だけでなく、その代償としての参勤交代の緩和を忘れないようにしたい。なお、財政が一応好転を見た9年後の1731（享保16）年には廃止されている。

〔問7〕 財政救済のために藩で行われた方法の中で、領主が家臣の俸禄を削減する時に、その削減率が50%に達する場合に知行の半分という意味からこれを半知といった。藩の財政窮乏が進んだ江戸時代中期以降、盛んに行われるようになった。

## 【2】

### 解答

問1 相対済し令　問2 足高　問3 イ　問4 ウ　問5 エ　問6 ア  
問7 エ　問8 イ

### 解説

問1 下線部(1)の「金銀出入」は金銭訴訟をさす。それを奉行所では取り上げないということから、「相対済し令」のことだと判断できる。ここでは、「前々の如く取上げ」ることにするというのだから、Aは相対済し令を廃止した時の史料だということがわかる。

問2 幕府の役職に就き職務を行うことは、御恩と奉公の奉公に当たるから、原則として職務遂行にかかる費用は自己負担である。したがって、多くの出費が予想される職に低い禄高のものを登用する場合には加増といって禄高を増すことになるが、禄高は個人ではなく家に与えるものだから、このような人材登用を繰り返すと幕府の人件費は単純に増加する。そこで

「御役勤め」の間だけ不足分を補うという方法が考え出された。この制度を足高の制という。

問3 三奉行は、幕府の重要直轄地域である、天領、江戸の町人居住地域、寺社領をそれぞれ支配する勘定奉行、町奉行、寺社奉行をさす。勘定奉行については幕府財政、町奉行については犯罪捜査と裁判、寺社奉行については寺社の統制のイメージが強いと思うが、地区割で行政などに当たる側面もある。このような地区割り支配のため、例えば複数地域にまたがる問題を解決するために評定所といった機関が必要となる。

問4 上げ米は1万石につき100石なので1%に当たる。Cの史料では上げ米を「御免」するといっているから、上げ米の制度が廃止された時の史料だとわかる。享保の改革の重要な施策のうちで反対が大きかったため、しばらくして廃止されたものがAの相対済し令とCの上げ米だったことは覚えておこう。

問5 平和な江戸時代、大名にとっての幕府に対する奉公は江戸警固のため交代で江戸に出仕する参勤交代だった。ところが上げ米で米の上納が定められたため、その分、参勤交代は緩和され、江戸に滞在する期間が半減された。原則として経済的貢納を伴わないので武士の世界での鎌倉時代以来の御恩と奉公の関係だったので、上げ米は大きな変化で反発も強かったと思われる。江戸幕府が奉公としての参勤交代を制度化したのは3代将軍の徳川家光の武家諸法度、寛永令の時だった。

問6 この問題まで、3つの史料の関連について意識をしていなかった人も、ここでA、B、Cともに1人の将軍の施策だということがわかる。Bの足高の制がわかれば、A・Cも徳川吉宗の享保の改革の施策だと判断できる。

問7 エの林述斎は、寛政異学の禁発令後の、聖堂学問所を林家から切り離し幕府の直轄とする時期の大学頭であることから判断できる。学問所が幕府の直轄となる頃から昌平坂学問所と呼ばれるようになる。『徳川実紀』は家康から家治までの10代の将軍の治績を記したもので、1843（天保14）年に完成した。アの「中国の民衆教化の書物」は明の朱元璋が制定した『六諭』をさす。イの青木昆陽については、甘譖すなわち救荒作物としてのサツマイモの栽培の提言だけでなく、徳川吉宗からオランダ語の修得を命じられたことも重要である。これが江戸時代後期の蘭学の隆盛の出発点になる。ウの小川笙船は吉宗が設置した目安箱に投書を行った町医者。小石川薬園は現在、東京大学の付属植物園となっており、園内に養生所の井戸の跡が残っている。オの『公事方御定書』は、大岡忠相らが編纂に当たった刑法・刑事訴訟法・行政法に当たるものを作成したものです。吉宗は法制度の整備にも熱心で、他に、1615（元和元）年から1743（寛保3）年までの幕府の法令を評定所に編纂させた『御触書寛保集成』も編まれている。

問8 太宰春台は荻生徂徠の弟子であることから判断できる。アの『夢の代』を著した山片蟠桃は、大坂商人が出資して設立した懐徳堂出身の特異な思想家として覚えておかなければならぬ人物。ウの松尾芭蕉は元禄期、エの滝沢馬琴は後期読本の代表的作家で化政期の人。オの『名所図会』は江戸後期に多く出版された、各地の名所、旧跡、神社、仏閣の由来などを記した通俗地誌で、挿絵が多数入れられている。問題の『江戸名所図会』は斎藤幸雄・幸孝・月岑（幸成）の3代を費やして編纂され、1834（天保5）～36（天保7）年にかけて刊行された。『名所図会』には他に『尾張名所図会』などがあるが、『尾張名所図会』の挿絵の1つが、多くの教科書に尾張の尾西地域の高機を用いた綿織物工業のマニュファクチャ

の様子を示す絵として載せられているので、教科書で確認しておこう。

享保の改革の施策は、大きく行政改革、財政改革、その他に分けられる。行政改革に関するものは、相対済し令、目安箱、『公事方御定書』などがある。財政改革については、吉宗は「米將軍」と呼ばれたように、米を基礎とした財政構造の安定をめざした。年貢収入の安定と増徴を企図した定免法の採用、新田開発の奨励などがそれに当たる。しかし、幕府の財政再建は容易には進まず、上げ米を実施せざるを得ない状況に陥った。その他では、江戸の都市政策、ことに火事対策が重要。火消組合「いろいろ47組」の設置は覚えておこう。他にも瓦屋根の奨励、火除地の設定、火見櫓の設置と消防活動に腐心している。

享保期の出来事として記憶しておくことに、質地騒動がある。幕府は、田畠が質流れの形で実質的に売買されてしまうのを禁止する目的で1722（享保7）年に質流し禁令を出した。しかし、この法令の発令を契機に、質地の無償取り返しを要求する質地騒動と呼ばれる騒擾が出羽長瀬などで起きると、幕府が法令を撤回したために、逆に質流れの形での土地の売買を認めることになり、かえってこの形をとった土地の集積が進むことになった。

江戸で最初の打ちこわしが発生したのもこの時期である。1732（享保17）年に享保の大飢饉が発生すると米価が高騰し、米の買占めを行っていると噂が流れた御用米商高間伝兵衛が襲われた事件である。

### 【3】

#### 解答

- [ア] 寅加（運上） [イ] 蝦夷地  
(1) 町人請負新田 (2) イ・エ  
(3) いりこ・ふかのひれ・ほしあわび（以上から2つ）  
(4) 赤蝦夷風説考 (5) 浅間山大噴火 (6) 松平定信

#### 解説

田沼意次は元紀州藩士であった幕臣の子で、父親は徳川吉宗が8代将軍に就任するとお供をして江戸へ出向き、旗本となった。意次は、病身の9代将軍徳川家重の下で頭角を現し、その後10代将軍徳川家治の代になって、1767（明和4）年に側用人、1772（安永元）年には側用人のまま老中と異例の出世を遂げた（側用人から老中となったのは彼が初めてである）。

さて、田沼政治の画期的な点は、商業資本を利用して財政再建をはかったことにある。従来の幕府財政は農民から徴収する年貢が中心であり（「本百姓体制」）、吉宗の享保の改革もその立直しが柱であった。しかし、年貢だけでは限界がある。意次は発達した商品流通に目を向け、そこへの課税を新たな財源としようとしたのである。以下、その具体的な諸政策について見ていただきたい。

- [ア] 意次は株仲間を積極的に公認した。同業の問屋商人などが結成した団体が仲間で、幕府は当初これを禁止していたが、元禄期には黙認し始め、吉宗は株仲間として公認を与えた。株仲間を通じて流通を統制・支配しようと考えたのである。意次はこれを受け継ぎ、さらに拡大したのだが、そこにはもう1つのねらいがあった。それは、株仲間からの冥加・運上（営業税）の徴収である。つまり、株仲間の枠を拡大して新たに公認することで、冥加・運上を

増収させ、幕府財政の不足を補おうとしたのである。

[イ] 意次は蝦夷地に目をつけて開発を計画した。

(1) 近世初期は飛躍的に耕地面積が拡大した時期である。日本の河川は急流が多い。それゆえ、中世までは河口付近に広がる平野部の開発は思うにまかせず、水田といえば丘陵部や微高地に限られていた。近世の大名は生産の拡大をはかり、新田の開発を積極的に進めた。その結果、耕地面積は17世紀初めの約164万町歩から約297万町歩へと2倍近くに激増した。新田開発の方法は、初期には代官見立新田だいかんみたてが中心であった。代官が調査を行い、幕府・諸藩が主導して行うものである。しかし役人がやることには限界がある。そこで、吉宗は商人の力を利用しようと考えた。町人が開発を請け負った新田を「町人請負新田」という。開墾地は「鉢下年季くわしたねんき」といって3年から5年ほど年貢を大幅に減免し、開発を奨励した。意次はこれを受け継ぎ、印旛沼や手賀沼の干拓を商業資本の導入により進めたが、干拓事業を進める中で利根川の大洪水が起り（1786）、失敗に終わった。

(2) 意次は専売制の拡大にも積極的に乗り出す。特産品や貿易品について幕府直営の座を設け、流通・販売の独占をはかった。1763（宝暦13）年には朝鮮人參座を設置し、各地に栽培の広がった朝鮮人參の流通統制をはかった。また、1766（明和3）年には銅座を再興した。長崎貿易の主要輸出品であった銅の精錬・販売を一手に握ろうとしたのである。さらに、1780（安永9）年には鉄座・真鍮座も設けている。

(3) 「俵物」とは、いりこ・ふかのひれ・ほしあわびの3品の海産物を俵に詰めたもので、清に輸出された。意次はこれに目をつけ、1785（天明5）年に長崎俵物役所を設けて貿易の拡大をはかった。さらに、これら海産物の産地である北海の漁場確保のため、意次は蝦夷地の開発を計画したのである（[イ]）。

(4) 蝦夷地の開発にはロシアとの貿易という計画も含まれていた。意次が老中であった安永・天明年間にはロシア船が蝦夷地に来航し、通商を求めていた。その頃、意次に交易の可能性を指摘したのが、仙台藩医工藤平助である。彼は『赤蝦夷風説考』を意次に献上し、蝦夷地開発の必要性を説いた。意次もこれに応え、2度にわたって最上徳内らの調査隊を派遣し、蝦夷地から千島にかけての調査を行った。

(5) 発達した流通経済に目を向けた意次の政策は、現在では現実的施策として評価も多い。しかし、あまりの経済偏重の政策は農村の疲弊や武士・下層民の困窮を招き、庶民から賄賂政治との批判を受けた。1783（天明3）年に浅間山大噴火が起ると、人々はこれを意次への「天罰」と受け止めた。翌1784（天明4）年には子の若年寄田沼意知おきともが江戸城中で旗本佐野政言さのまさことに刺殺される（佐野政言は民衆から「世直し大明神」ともてはやされた）。その後意の中、1786（天明6）年に10代将軍家治が亡くなる直前に意次は失脚し、多くの計画も中止された。

(6) 田沼政治の後半期に当たる天明年間（1781～1789）、東北地方では冷害・長雨による大規模な飢饉が続いていた。天明の飢饉である。都市部でも米の供給が不足し、1787（天明7）年5月には大坂・江戸を中心に全国の都市で打ちこわしが発生した（天明の打ちこわし）。こうした時期に老中に就任したのが松平定信である。定信は吉宗の孫に当たり、白河藩主として飢饉の惨状を目の当たりにしていた。打ちこわしの翌6月に江戸に参じた定信は、悲壯な決意をもって寛政の改革に臨むのである。

#### 【4】

##### 解答

問1 松平定信　問2 天明　問3 棄捐　問4 イ　問5 オ　問6 エ  
問7 イ　問8 エ　問9 ウ　問10 ア

##### 解説

問1 (1) の人物については、『函底秘説』の著者であることから判断することはほぼ不可能であるが、「江戸の打ちこわしの直後に…老中首座」となったこと、「林子平を処罰」したことなど、それぞれ単独でも判断できる記述が多数示されている。松平定信と容易に判断できるだろう。松平定信は著述も多く、『函底秘説』を受験生が知っている必要はないが、老中退任直前までを記した自叙伝『宇下人言』、隨筆『花月草紙』は覚えておこう。「江戸の打ちこわし」とは、この場合は1787(天明7)年に起きた天明の打ちこわしのことをさす。この直後に定信は老中に就任し、翌年、まだ15歳であった将軍家斉の将軍補佐となった。林子平の処罰については重要。蝦夷地近辺へのロシアの接近が頻繁になっていく中、海防の強化を説いた『海国兵談』を著した林子平は、人心を惑わすものとして蟄居、著作は絶版とされた。その4カ月後、ラクスマンが根室に来航し、林子平の指摘は現実のものとなった。

問2 「天災凶荒の頻発」は、享保・天明・天保のいわゆる江戸の三大飢饉のうちでも最大で、東北地方を中心に襲った天明の飢饉をさしている。定信の白河藩はこの飢饉に際して1人の餓死者も出さなかったといわれ、その実績が定信の老中登用につながった。

問3 「幕臣の窮乏を救う」から棄捐令だとわかる。旗本・御家人の窮乏化を看過することができず、新規借入れ金利の引下げと1784(天明4)年以前の借金の帳消しを内容とする棄捐令を出したが、むしろ旗本・御家人の金融逼迫を招くことになった。

問4 神尾春央は本文中の「胡麻の油と百姓は…」で有名な、1737(元文2)年から1753(宝暦3)年にかけて勘定奉行を務めた人物。坪刈りによる実収穫量算定に基づき年貢を徴収する有毛検見法を採用したことでも知られている。

問5 佐野善左衛門は政言のこと。政言は、田沼意次の息子で若年寄であった田沼意知を殿中で殺害したが、かえって人々は彼を「世直し大明神」と称えた。

アトイは江戸時代前期の代表越訴型一揆に見られる、いわゆる義民の代表例で、下総の佐倉惣五郎、上野の篠茂左衛門として知られる。大塙平八郎は天保の改革前に大坂で起きた大塙の乱の首謀者。ここまででは基礎的な知識だが、エの関兵内は細か過ぎる知識。1764(明和元)年に(中山道)伝馬騒動といわれる近世最大規模といわれる大一揆が武藏国、現在の埼玉県で起きた。助郷の負担の増加が原因だった。この一揆の首謀者として処刑されたのが関兵内で、義民として語り継がれた。

問6 新將軍の実父とは一橋治済のこと。徳川吉宗とその子家重の代に、家康による尾張・紀伊・水戸の御三家にならって、田安・一橋・清水の御三卿が創設された。田安家の初代田安宗武は、賀茂真淵を後援し、自らも国学を学び万葉調の歌を詠んだ人物。定信はその子、したがって定信は吉宗の孫に当たる。

1789(寛政元)年に、時の光格天皇は、皇位に即いたことのない父閑院宮典仁親王に太上天皇の称号を贈りたいと幕府に打診したが、定信は拒否した。いわゆる尊号一件という事件である。時を前後して、家斉も、將軍になったことのない父治済を大御所として江戸城西ノ

丸に迎えたいと希望していたのだが実現できなくなった。尊号一件の処理を契機に定信は将軍補佐辞任を願い出るが、老中まで解任されてしまう。

問7 大名に米の備蓄を命じたのは囲米の制のこと。1万石につき50石の備蓄をさせた。囲米と享保の改革の時の上げ米とを混同しないようにしよう。

問8 火付盗賊改は、町奉行が町人の犯罪を管轄するのに対し、放火・強盗・博徒など強力犯を取り締まるべく設置されたが、両者の境界は次第に曖昧なものとなった。火付盗賊改は「加役」といって、本来の役職は先手頭つまり戦争に際して先陣を勤める番方（武官）が平時に兼任したものであり、役方（文官）である町奉行とは系列を異にする。長谷川平蔵宣<sup>のぶため</sup>以は定信が老中に就任した1787（天明7）年に火付盗賊改に就任し、折からの天明の飢饉による江戸への人口流入と、それによる治安の悪化対策として人足寄場の設置を提言した人物である。離村し、宗門人別改帳からはずされた無宿人を強制的に収容したが、収容した者に職業訓練をほどこし、工賃を支払い、それを強制貯蓄させ出所時に与えるなど近代の監獄制度の先駆をなす施策を行った。人足寄場が置かれた石川島は隅田川の河口に佃島<sup>つくだじま</sup>と並んで形成されていた中洲だったが、次第に埋め立てられ幕末頃には一つながりの陸地を形成している。

問9 江戸の町方は、町奉行の下、樽屋・奈良屋・喜多村の江戸町年寄を頂点とする自治が行われていた。町入用は江戸の町方運営のための費用だが、寛政の改革で消防関係費用等の節約が命じられ、その七分（70%）を積み立てることとされた。その積金の管理運営を行うために設けられたのが江戸町会所である。

問10 『赤蝦夷風説考』は工藤平助が蝦夷地の状況とその開発について述べた著作で田沼意次に献上された。「赤蝦夷」とはロシア人のことである。『春色梅暦』は『春色梅児誉美』とも表記される為永春水の人情本。為永春水は天保の改革で手鎖の刑に処せられ、本は絶版となった。『仕懸文庫』は山東京伝の洒落本。寛政の改革で京伝は手鎖の処罰を受けた。『西域物語』は本多利明が西洋諸国の国勢、風俗を描いたもの。どの書物も入試では必ず覚えておかなくてはならないものである。

## 13章 幕藩体制の動揺

### 問題

#### ■確認問題

- 1 戊戌封事 2 郡内騒動 3 洗心洞 4 生田万 5 人返しの法  
6 時習館 7 調所広郷 8 黒砂糖 9 越荷方 10 鍋島直正  
11 A 江戸 B 御府内 12 C 菱垣廻船 D 冥加 E 上知

#### 【1】

#### 解答

- (1) 天保 (2) イ 沢庵宗彭 ロ 明正天皇 (3) 川越 (4) 逃散  
(5) イ 陣夫役 ロ 軍役 (6) 勧農 (7) イ 虫送り ロ 鯨油  
(8) 青木昆陽 (9) 浅間 (10) 日雇 (11) イ 社倉 ロ 七分積金  
(12) 村方騒動 (13) 五品江戸廻送令  
(14) イ 農兵 ロ 江川英竜 ハ 土方歳三

#### 解説

江戸時代の飢饉と一揆に関する問題である。(3)・(7)・(14) はかなりの難問である。

(1) 天保の飢饉は三大飢饉の1つに数えられ、1833(天保4)年から1836(天保7)年にかけて起こった全国的な飢饉である。米価は急騰、農村は著しく荒廃し、下層民の困窮は甚だしかった。また、大塩の乱を初めとする大規模な一揆や打ちこわしを誘発した。

(2)

イ 沢庵宗彭は大徳寺の禪僧であったが、紫衣事件の際に幕府を批判したことから出羽上山に配流された。のち許されて徳川家光の帰依を受けた。

ロ 明正天皇は奈良時代の称徳天皇以来の女帝で、母親は徳川秀忠の娘の徳川和子である。

(3) 水野忠邦によって武蔵国川越・越後国長岡、出羽国庄内の三方領知替が命じられ、川越藩は庄内藩へ転封されることになったが、庄内藩の農民の入封反対闘争にあって国替は撤回された。

(4) 逃散は古代より行われた農民の抵抗の方法で、他領や他村に逃亡することである。江戸時代初期には多く見られ、領主は厳しくこれを取り締まった。数名から数人の小規模の集団で逃亡する場合を欠落と呼び区別することもある。

(5)

イ 陣夫役は村高に応じて割り当てられ、労働力として陣夫や馬が徴発された。

ロ 江戸幕府は軍役に関して軍役令を規定しており、所領や石高をもととして、負担額や人員構成が詳細に定められた。

(6) 幕府や大名の勧農政策により、新田開発が行われて耕地面積が拡大し、農業技術が著しく進歩した。

(7)

イ 虫送りは農村における年中行事の一種で、稻などにつく病害虫を追い払う儀式である。

主に初夏に、藁で人形を作り、これに害虫をくくりつけて行列の中心とし、たいまつとともに鉢や太鼓を鳴らして行列し、村外に送るという形式をとる。

ロ 鯨油は鯨からとった油であり、盛んに利用されるようになったのは捕鯨が発達した江戸時代後期以降のことである。当初鯨油は、灯火用として使用されていたが、享保の大飢饉以降、稻の害虫駆除として用いられるようになり、文化・文政期には九州・四国・中国地方で広く使用された。

(8) 青木昆陽はその著書『蕃薯(諸)考』『甘譜記』の中で、救荒備蓄のために甘譜の栽培を勧めたことから、「甘譜先生」とも呼ばれた。なお、甘譜はいもの一種、甘蔗はさとうきびのことである。

(9) 浅間山は長野県と群馬県にまたがる火山で、1783(天明3)年に大噴火を起こし、甚大な被害をもたらした。

(11)

イ 社倉は義倉・常平倉と並んで三倉の1つに数えられる。領主が奨励金・米を供出したり、住民が高に応じて負担したりして凶作に備えた。

ロ 七分積金は明治維新以降は東京市に引き継がれ、養育院の設置の費用に充てられた。

(12) 村方騒動は村役人や富裕者の不正を、一般の農民が領主に訴えたものであり、合法的な闘争であった。

(13) 五品江戸廻送令は1860(万延元)年に出された法令で、重要な輸出品である雑穀・水油・蠟・呉服・生糸の5品を産地から横浜へ直送することを禁じ、江戸を経由することを定めた法令である。

(14)

イ 武州(世直し)一揆は1866(慶応2)年6月に幕府領の武藏国秩父で貧農を中心として起こった百姓一揆が拡大したもので、武藏国15郡、上野国2郡の豪農や村役人、商人など500カ所余りが打ちこわしにあった。参加者は武藏・上野・下野・相模・常陸の関東5カ国10万人に及んだといわれる。幕府は諸藩に鎮圧を命じるとともに、自らも鎮圧に当たった。この時主力となったのは、農村から屈強な農民を募って編成された農兵と呼ばれる兵士であった。

ロ 江川英竜(太郎左衛門)の建言は幕府に認められなかったが、その後にその子江川英敏が編成した代官所支配下の農兵は、武州一揆の鎮圧において幕府の兵よりも活躍し、その有効性を示した。

ハ 土方歳三は新選(撰)組の副長で、鳥羽・伏見の戦い以降は新選組の戦闘指揮をとった。五稜郭の戦い(箱館戦争)で戦死した。

## 【2】

### 解答

- 問1 1 徳川家齊 2 徳川家慶 3 水野忠邦 4 鳥居耀蔵 5 天明  
6 棄捐 7 株仲間 8 上知
- 問2 × 問3 (イ) うげのひとこと (ロ) 松平定信の自叙伝
- 問4 (イ) 石川島 (ロ) 隅田川 問5 江戸 問6 人返しの法
- 問7 阿部正弘 問8 無宿人・軽罪者など
- 問9 江戸の治安を強化するため、授産所を設けて下層民に職業技術を与える。
- 問10 江戸に流入した貧農の帰村を強制して、飢饉で荒廃した農村の復興をはかる。

### 解説

問1

1 11代将軍徳川家齊は、老中松平定信を罷免した後も長期にわたり将軍の座に居続け、「大御所時代」を現出した。定信とは正反対に華美を好んだため、低位貨幣の鋳造などと相まって経済が活性化し、化政文化が開花したが、一方で農村の荒廃も進んだ。こうした中で、後期には天保の飢饉（1833～1836）、加茂一揆・郡内騒動（1836）、モリソン号事件・大塩の乱（1837）といった幕府を揺るがす事態が続出した。

2 家齊は、1837（天保8）年に將軍位を子の家慶に譲ってからも「大御所」として実権を握った。1841（天保12）年に家齊が亡くなると家慶が最初に行ったことは、水野忠邦を老中に登用して改革を断行させることであった。1853（嘉永6）年にペリーが来航した時の將軍としても覚えておこう。

3 唐津藩主水野忠光の二男として生まれた水野忠邦は、長崎警護役の唐津藩では幕政に関与できなかったため、1817（文化14）年に自ら願い出て浜松藩に転封される（25万石から15万石への減封であった）。その後は順調に出世を重ね、1841（天保12）年、12代家慶から老中に任せられて天保の改革に当たった。上知令の失敗により1843（天保14）年に退任した後、翌1844（天保15）年には老中に復帰したが、再度辞職に追い込まれると、懲罰的に転封された山形藩の地で最期を迎えた。

4 水野忠邦から江戸南町奉行に登用された鳥居耀蔵<sup>とりい ようぞう</sup>は、父が昌平坂学問所で大学頭を勤めた林述斎ということもあり、高島秋帆の洋式砲術の試用に反対するなど洋学には否定的な立場をとった。後に忠邦を裏切るが、忠邦が復帰すると逆に解任され、晩年は丸亀藩で謹慎の身となつた。

5 1782（天明2）年から1787（天明7）年にかけて発生した、長雨や冷害・水害による全国的な飢饉を天明の飢饉といふ。とくに、東北地方では1783（天明3）年の浅間山大噴火による火山灰の影響で日照不足に陥り、餓死・疫病による死者は合わせて30万人近くに上つたと見られる。このように飢饉が大きな被害をもたらした背景には、貨幣経済の発達、享保の改革における年貢増徴策、田沼政治の重商主義政策が指摘される。白河藩主として領内で1人の死者も出さなかつたといわれる松平定信は、その手腕が評価されて1787（天明7）年、幕府の老中首座に登用された。

6 棄捐令は、旗本・御家人の救済を目的に、札差からの借金を帳消しにしたもの。これも寛政の改革における政策を受け継いでいる。

7 水野忠邦は、江戸市中で進む物価騰貴（インフレーション）の原因が、特權的な三都商人による不正な価格引上げにあると考えて、1841（天保12）年に株仲間解散令を発した。しかし、物価高騰の本当の原因是、在郷商人の成長による三都商人の取扱量の減少にあったので、株仲間の解散は逆効果となってインフレに拍車がかかった。10年後の1851（嘉永4）年に株仲間再興令が出されるが、三都商人が往年の勢いを取り戻すことはなかった。

8 幕府権力の強化をはかる水野忠邦は、1843（天保14）年に上知令を発し、江戸・大坂10里四方の約50万石を幕府の直轄地とすることを目論んだ。その目的は、対外防備の強化、財政の安定（都市近郊は手工業や商品作物の栽培で経済的にうるおい、年貢課税率の高い私領が多かったので、幕領にしたかった）などである。

問2 上知令は結局、対象となった江戸・大坂の周辺に所領を持つ大名・旗本の猛反発を受けて撤回を余儀なくされ、忠邦は失脚した。上知令は、所領を没収するものではない。他地域に代替地も用意されており、単なる転封だったのである。全国の領主権を握る将軍が、臣従の立場である大名らの所領を自由に決定するのは当然のことであり、実際に近世初期には大がかりな転封が行われていた。それが大名の反対でできないという事態は、幕府権威の失墜を如実に示すものであった。

問3 『宇下人言』は松平定信の自叙伝で、自らの名を分解して書名とした（宇下=定／人言=信）。1758（宝暦8）年の生誕から1793（寛政5）年に老中を辞職する直前までを記し、問題文の史料で挙げられている天明の飢饉における農村人口の減少や、寛政の改革についての貴重な史料となっている。なお、老中退任後については隨筆『花月草紙』を残している。

問4・問8・問9 寛政の改革では、農村の復興に加えて江戸の治安回復が課題となった。というのも、1780年代に天明の飢饉などの影響で流入した下層民が治安を悪化させ、1787（天明7）年の大規模な打ちこわしを引き起こしていたからである。

定信はそこで1790（寛政2）年に旧里帰農令を出し、資金を援助するなどして帰村を奨励した。また、町入用を節約しその7割を積み立てておく七分積金を行わせて緊急時に備えた。そして、授産所として設けたのが人足寄場である。

人足寄場の設置目的は、無宿人・軽罪者に職業訓練や生活指導を行い、社会復帰させることであった。日本初の「更正」施設といってよい。この設置を定信に建言したのが、火付盗賊改方の長谷川平蔵である。

設置の場所は、隅田川の河口にある石川島にあり、一般人から「隔離」するという意味合いもあった。

問5 近世の史料で「御府内」と出てきたら江戸市中のことをさすので、これは覚えておこう。

問6・問10 水野忠邦が老中となった時期にも、天保の飢饉（1833～1836）などの影響で下層民の江戸流入が進み、治安悪化の原因となっていた。そこで、忠邦は1843（天保14）年に人返しの法を発して江戸人別改めを強化し、農民の出稼ぎを禁じて帰村を強制することで荒廃した農村の復興をはかった。

寛政の改革における旧里帰農令では援助を行って帰村を促したのに対して、人返しの法では江戸からの強制退去であったことに注意してほしい。但し、故郷に帰ることのできない者たちは江戸周辺の農村に留まったため、治安をかえって悪化させる結果となった。

問7 水野忠邦が失脚した後、老中首座に就いたのが備後福山藩主阿部正弘である。彼は

1853（嘉永6）年にペリー率いるアメリカ東インド艦隊が浦賀沖に来航した際、12代將軍徳川家慶が病床に伏せる中で幕府の外交責任者として対峙した。朝廷への報告を行い、諸大名や幕臣に意見を求める上で翌年の開国（和親条約）を決定したことは、倒幕への引き金を引いたといわれる一方で、台場・洋学所・海軍伝習所の設置や井上清直・川路聖謨ら人材の登用など、一連の「安政の改革」は評価が高い。

### 【3】

#### 解答

- (a) (4) (b) (5) (c) (1) (d) (4) (e) (2)  
(1) 上杉治憲（鷹山） (2) 佐竹義和 (3) 黒砂糖 (4) 横井小楠 (5) 伊達宗城

#### 解説

諸藩の改革、雄藩をテーマに出題されている問題。とくに雄藩は頻出テーマなので、時期、藩主、登用した人材、実施した政策についてまとめておこう。

(a)・(b)熊本藩について

時期：田沼時代

藩：熊本藩

藩主：細川重賢（銀台）

人材：堀平太左衛門

実施：藩校時習館設立、土地制度改革（検見の強化、地引合せ（検地）など）、殖産興業推進（養蚕など）

(1)米沢藩について

時期：寛政期

藩：米沢藩

藩主：上杉治憲（鷹山）

実施：儉約を勧める。農村復興、養蚕・織物業振興、藩校興讓館再興

(2)・(c)秋田藩について

時期：寛政期

藩：秋田藩

藩主：佐竹義和

人材：疋田定常・大越範国など

実施：藩校明徳館の設立。養蚕・織物・銅などの生産奨励

(3)・(d)薩摩藩については、調所広郷の時代と島津斉彬以降の時代に二分されるので注意。

時期：文政～嘉永

藩主：島津斉興（後見：島津重豪）

人材：調所広郷（財政担当の家老）

実施：藩債 250 年賦返済法、奄美三島（奄美大島・徳之島・喜界島）の黒砂糖の専売を実施、

琉球貿易を利用した抜荷（密貿易）



#### ●島津斉彬による藩政改革

琉球で密貿易の責任をとり調所広郷が自殺。島津斉彬が改革を推進。製錬所、反射炉、ガラス工場の建設（これらの洋式工場群を集成館という）。洋式兵備の充実。



#### ●島津久光による藩政改革

斉彬の次に、忠義（斉彬の甥）が藩主となった。父久光が後見。機械を導入し、技師を招いて、邸内に洋式機械工場の鹿児島紡績工場建設。

(e)長州藩（萩藩）

時期：天保～安政

人材：村田清風

実施：専売制の緩和。越荷方（下関を通過する商品を担保に他国船に高利貸を行う）の設置  
37 カ年賦皆済仕法（借財を 37 カ年で返す）

(4)福井藩については、その内容について入試で問われることはないが、幕末での著名人を多く輩出しているので、人物で押さえよう。

時期：幕末期

藩主：松平慶永（將軍繼嗣問題では一橋派。安政の大獄で隠居、復帰後に政事総裁職。）

人材：横井 小楠（熊本藩士で、松平慶永の顧問。公武合体、開国貿易を主張。明治政府に出仕するが暗殺される。）  
橋本左内（緒方洪庵に医学を学ぶ。松平慶永の腹心として一橋派で活躍。安政の大獄で刑死。）

由利公正（維新後は明治政府参与。五箇条の（御）誓文原案を起草。岩倉使節団にも同行。）

実施：富国政策

(5)宇和島藩について

宇和島藩も詳細な改革内容は不要だが、伊達宗城は以後も登場するので押さえておこう。

時期：幕末期

藩主：伊達宗城（將軍繼嗣問題で一橋派。安政の大獄以後は公武合体を推進。王政復古後は議定として新政府に参画。明治期に日清修好条規を締結する際の全権。）

実施：洋式兵制の導入、殖産興業

日本史では同じ名字の人間が様々な時代に登場するため、しっかりと整理しておく必要がある。今回出題された氏について、日本史入試で登場する人物についてまとめておいたので、確認しておこう。系図を暗記する必要はないが、資料集などで確認はしておこう。

細川氏：足利一族で管領を務める。安土・桃山時代以降は支族の熊本藩の系統が栄える。

細川頼之	室町時代	管領として足利義満を補佐
細川勝元	室町時代	管領。応仁の乱の際に東軍の総大将
細川政元	室町時代	管領。勝元の子。足利義澄を擁し権力を振るうが、暗殺される
細川晴元	戦国時代	管領。家臣の三好長慶に追放される
細川忠興	安土・桃山時代	管領家ではなく支族の出。信長・秀吉に仕え、熊本藩の祖となる
細川重賢	江戸時代	【3】解説参照
細川護熙	平成時代	1993（平成5）年、内閣総理大臣。 非自民連立内閣で55年体制を終わらせた

上杉氏：室町時代までは関東管領。謙信の時は越後、景勝以降は米沢の大名。

上杉禪秀	室町時代	関東管領。鎌倉公方足利持氏に反抗して上杉禪秀の乱を起こす
上杉憲実	室町時代	持氏に疎まれ、永享の乱で幕府軍とともに持氏を討つ 戦後は関東で最大の実力者になるが、出家。足利学校を再興
上杉憲忠	室町時代	関東管領。上杉憲実の子。足利成氏と不和になり、暗殺される これを機に享徳の乱が勃発
上杉憲政	戦国時代	関東管領。後北条氏と争い関東を追われる。越後の長尾景虎を頼り、彼を養子として上杉の名跡と関東管領職を譲る
上杉謙信	戦国時代	もとは長尾氏（景虎）。憲政から上杉氏の名跡を譲られ、上 杉謙信と名乗る。甲斐の武田信玄との川中島の戦いが有名 北陸最大の戦国大名となる
上杉景勝	安土・桃山時代	謙信の養子。豊臣秀吉の下で五大老 関ヶ原の戦いで敗れて米沢へ転封となる
上杉治憲	江戸時代	【3】解説参照

島津氏：鎌倉時代より薩摩にあり戦国時代に勢力を伸ばす。薩摩藩は幕末には雄藩として活躍。

島津貴久	戦国時代	戦国大名の地位を確立。ザビエルの鹿児島での布教を許可した
島津義久	戦国時代	貴久の子。ほぼ九州の全域を征服するが、豊臣秀吉に従わず討伐を受けて降伏し薩摩の支配権を認められる
島津家久	江戸時代	貴久の弟義弘の子。琉球を征服
島津重豪	江戸時代	当主の時に造士館を設立 隠居後も、齊宣・齊興を後見し、調所広郷を登用した
島津斉彬	江戸時代	齊興の子。殖産興業・洋式兵備の充実に力を入れる。集成館を設立 将軍継嗣問題では一橋派の中心であったが、病死
島津久光	江戸時代	斉彬の弟で藩主忠義を後見。公武合体運動の中心として上洛、寺田屋事件で尊讓派を弾圧する一方、大原重徳を擁して幕政改革を迫った。またその帰途、生麦事件を起こした

毛利氏：元就の時、中国地方の大名へと成長。関ヶ原で周防長門に領地を削減された。長州藩は幕末には雄藩として活躍。

毛利元就	戦国時代	一豪族から中国最大の大名となる。厳島の戦いで陶晴賢を討ち、大内氏・尼子氏などを滅ぼす
毛利輝元	安土・桃山時代	元就の孫。豊臣政権下で五大老。関ヶ原の戦いで減封
毛利吉元	江戸時代	長州藩の藩校である明倫館を設立
毛利敬親	江戸時代	幕末の長州藩主。村田清風を登用

松平氏：徳川家康はもともと松平氏を名乗っていた。家康の親族の多くは松平姓を与えられた。

松平信綱	江戸時代	3代家光・4代家綱に仕えた老中。島原の乱を平定
松平定信	江戸時代	白河松平氏。吉宗の孫で田安宗武の子 老中として寛政の改革を指導
松平康英	江戸時代	長崎奉行。フェートン号事件の責を負い自殺
松平容頌	江戸時代	保科正之を祖とする会津松平氏。 <sup>にっしんかん</sup> 藩校日新館を設立
松平慶永	江戸時代	福井松平氏。【3】解説参照
松平容保	江戸時代	会津松平氏。京都守護職。戊辰戦争で明治新政府の追討を受けた

伊達氏：政宗の時、東北で大勢力となる。嫡子の系統の仙台藩と、庶子の系統の宇和島藩に分かれる。

伊達稙宗	戦国時代	伊達家の分国法『塵芥集』制定
伊達政宗	安土・桃山時代	稙宗の曾孫。東北で大勢力となり仙台藩の祖となる 支倉常長を歐州に派遣する
伊達宗城	江戸時代	宇和島伊達氏







会員番号	
------	--

氏名	
----	--